

ソシュール「一般言語学講義」の論理

川 崎 誠

一 ソシュールと弁証法

ソシュールの思想と弁証法との関係については、すでに幾つかの指摘がある。例えば丸山圭三郎『ソシュールの思想』のなかには次のような叙述が見られる。

ソシュールは、まず最初にこの歴史的経験のレベルに身を置いて、社会制度としてのラングの強い拘束力を指摘したのち、今度はラングの本質に照明を当てる作業を通して、純粋な可能性のレベルから人間と社会との関係は、自然法則を超えた次元で、作り作られる弁証法をもつことを指摘した。(p.152)

またケルナーはソシュールがヘーゲルの影響を受けた可能性について次のように述べている。

ソシュールはまた、当時の多くの知識人と同じく、1817年に出版された『エンチクロペディー』に親しんでいた節がある。しばしば言語学に新世紀を拓いたと解釈される1870年、丁度この影響力の多大な著述が再版されていることはいくつかの理由で意義ぶかいと思われる。(p.5)

けれども周知のように、ヘーゲル論理学が十全に展開されるのは『エンチクロペディー』（いわゆる『小論理学』）ではなく、『論理学』（いわゆる『大論理学』）においてのことである。ソシュールの思索が弁証法的であるという以上、

やはり『大論理学』との関連が探られねばなるまい。

そしてケルナーも『大論理学』に触れないわけではない。曰く、「[私が]この著述『大論理学』を持ちだしたのは、あとで、言語における対立、消極性、差異、同一性などの問題に関するソシュールの考え方が、すでにヘーゲルに兆していた可能性を立証したいからである」(p.5)、と。けれども『大論理学』における論理の展開を辿るという仕方ではヘーゲルを追思惟することを、ケルナーはしていない——この点は丸山も同じ——。つまりそこで謂われる「言語における対立」等の問題は連文において探究されたものではない。だが「論理」とは——本稿が後にその実際を示すように——その勝義において連文的推論である。だからヘーゲル論理学の場合であれば歩一步一步進む『大論理学』の叙述展開こそが論理なのであって、「対立物の統一」「同一性と非同一性との同一性」等々ヘーゲル論理学の定番を幾ら唱えても当の論理には達しえない。このことは、『大論理学』のどの一頁でもよい、実際にこの書物を開いてみれば、定番からは想像できない緻密な議論の積み重ねが見出されることから分かるはずである。無論読者はそれを読み解かねばならないのだが、読解が実に難物である。

さらにウィトゲンシュタインが喝破したように、論理には、意味から区別されねばならないという困難もある。『論理哲学論考』に曰く、

3-33 論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。

かかる警句にもかかわらず、しかし人はともすれば意味に目を奪われがちであり、論理を把握することはそれだけ難しくなる。

とはいえ論理は言葉なのだから、論理を措いて著者の言葉〔思想〕の把握されることはない。ソシュールの思想が弁証法的だということは、彼が実際に述べたその言葉の、その連文のなかに弁証法的論理が見出されること以外ではないのである。事実ソシュールは『大論理学』における論理の進展に沿う形で自らの思想を紡いでいった。本稿はこのことを、「第3回講義」(1910

年 10 月～1911 年 7 月) を読み解くなかで示そうと思う。採り上げるのは 1911 年 5 月 30 日分、コンスタンタンの受講ノートでは当日の 3 分の 2 ほどが経過した箇所から最後までである。

ただし上述のように、ヘーゲルの『大論理学』はすこぶる難しい。そこで本稿では具体的な言語事実を参考に叙述を進める。かくすることで『大論理学』における論理の展開がイメージしやすくなり、またソシユールの思想との関連もより分かりやすくなるはずである。参照する言語事実はある脚本家の書く次のものである。

1 月のある夜、テレビでニュースを見ていると、スマートフォンについて街頭インタビューをしていた。すると、30 代らしき男の人が、次のように答えた。

「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」

どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる」。

また、昨年夏のこと。大きな試合に出場が決まったプロスポーツ選手が、テレビ番組で次のように話していた。

「自分が出れるとは思わなかった」

どうです、この日本語。「出れる」ですよ、「出れる」。

これらは「ら抜き」の言葉を認めた弊害である。彼らは「～することができる」という「可能」のニュアンスを伝えたかったのだと思う。「ら抜き」の場合、「出れる」で「可能」は示せし、「行く」は「ら抜き」とは関係なく「行ける」で示せる。しかし、日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない気がしたのではないか。そして咄嗟に出たのが「行けられる」であり「出れる」だった。

だが、彼らを一方的に責めるわけにはいかない。責められるべきは「ら抜き」を許したことだ。常套思考の「言葉は生きもの。変化は当然」を猛省する必要がある。

先ごろある女性国会議員のインタビューをテレビで見たが、みごとにまるで「ら抜き」で語る。もしかしたら「週末は地元に戻れた」とでも言うかと思ったが、さすがにそれはなかった。興味深かったのは、「ら抜き」

で語る彼女の言葉に、画面表示ではすべて「ら」が加えられていたことだ。
テレビ局の良心を見た気がした。

(内館牧子「この途方もない言葉」『日本経済新聞』2011年2月19日)

二 「第3回講義」読解

「第3回講義」の5月30日分は全88個の文から成るが、本稿で読み解くのは第59文からである。

(59) 事実われわれは、変遷は連続性の諸形式の一つにすぎないと言うにとどめた。En effet, nous nous sommes bornés à dire que l'altération n'était qu'une des formes de la continuité.

私の見るところ、この一文に対応する『大論理学』の叙述は、概念論第3編「理念」第2章「認識」の「A 真なるものの理念」のうち「a 分析的認識」の冒頭・すなわち1パラグラフ第1文である。

<大> a 分析的認識 1パラグラフ 第1文

分析的認識と総合的認識との区別はしばしば、前者は既知のものから未知のものに進み、後者は未知のものから既知のものに進む、というように述べられている。Den Unterschied des analytischen und synthetischen Erkennens findet man zuweilen so angegeben, daß das eine vom Bekannten zum Unbekannten, das andere vom Unbekannten zum Bekannten fortgehe.

関連する『一般言語学講義』——以下CLGと略——の叙述に「時間における変遷と結びついた・時間における記号の連続性は、一般記号学の一原理である」(p.109)と説かれるように、「第3回講義」においても「変遷」・「連続性」は「記号の変遷」・「記号の連続性」である。「変遷 *altération*」はラテン語に遡って'*alterāre*'「変える」←'*alter*'「他の」に由来するが、「記号の変遷」に

においても「(現存する) 記号」が「他になる」ことで「既知のものから未知のものに進む」。これを上に引いた本稿での例に即して言えば、「行ける」が「行けられる」に進むのである。そして「行けられる」の類推的創造は比例四項式 *la formule de la quatrième proportionnelle*

食べる : 食べられる = 行ける : x

x = 行けられる

によって与えられるから、その限り「分析的認識」であると言える（なお、ここでの「行ける」には『*can*』のニュアンスはこもっていない）。

他方「連続性 *continuité*」は '*continère*' 「離さずに置く」 ← '*co*' 「同時に」 + '*tenère*' 「留ませる」に由来し、「記号の連続性」において「(新しく置かれた) 未知のもの」は「既知のもの」と結ばれている。例に即しては「行けられる」が「行ける」と結ばれている。このことは、「行けられる」を「この途方もない言葉」と呼ぶ聞手（脚本家）が、それにもかかわらず、「行けられる」に「行ける」と同じ『*行くことができる*』という『可能』のニュアンス」を見ていることに示される。両者が結ばれていないなら、30 代男の発話は理解されなかったはずである — この点後に触れるところがある —。つまり「未知のものから既知のものに進む」。そしてそれは「総合的認識」だと言える、というのは

<CLG> 言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない;そして進化現象はすべてその根源を個人の区域にもつ。この原理は……（中略）……かくべつ類推的改新に適用される。(p.235。傍点は引用者)

のだからである。

(60) この欠落は、変遷の諸要因を不分明なままにしてきたという単純な理由による仮のものである。 *Cette lacune est voulue provisoirement pour cette simple raison que nous avons laissé les facteurs d'altération*

indistincts.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 2 文

しかしこの区別をよりくわしく考察するならば、こうした区別にはっきりとした思想を見出すことは、まして概念を見出すことは困難であろう。 Es wird aber, wenn man diesen Unterschied näher betrachtet, schwer sein, in ihm einen bestimmten Gedanken, viel weniger einen Begriff zu entdenken.

前文の「言うにとどめた」・つまり「明言しなかった n'avoir pas été explicite」(CLG p.109) を承けて、「この欠落」と謂う。

『大論理学』での「区別」は、「第 3 回講義」に即しては「変遷」(既知のものから未知のものに進む)と「連続性」(未知のものから既知のものに進む)とのそれである。けれども「こうした区別にはっきりとした思想を見出すことは、まして概念を見出すことは困難である」ゆえ、「第 3 回講義」でも「変遷の諸要因を不分明なままにしてきた」のである — 'indistinct↔distinct>distinction ; Unterschied' —。

(61) これらの[変遷]の諸要因はその効果において実に混じり合っており、これを解きほぐすのは無理なことである。 Ces facteurs sont tellement mêlés dans leurs effets qu'il n'est pas prudent de les démêler.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 3 文

認識は一般に未知であることから始まる、とすることができる、というのはそれについてすでに既知であるものを人びとは学び知ることはないからである。 Man kann sagen, das Erkennen fange überhaupt mit der Unbekanntschaft an, denn etwas, womit man schon bekannt ist, lernt man nicht kennen.

'mêlé'に対しての'démêler'だが、後者は「解きほぐす・解明する」であり、人は解明されたことを「認識する」。だから或ることが「実に混じり合っており、解きほぐすのは無理なことである」ならば、或ることは「未知であること」である。つまり「これらの（変遷の）諸要因」は「未知であること」なのだから、そこから「認識は一般に始まる」。これに対して、「それについてすでに既知であるものを人びとがはじめて知る *kennenlernen* ことはない」、これは確かなことだろう。

(62) 変遷の諸原因をそれらの種々相において探究してきたのではないゆえ、われわれはそれらが必然的に働くかどうかを探究することはできないのである。 *Puisque nous n'avons pas recherché les causes de l'altération dans leur variété, nous ne pouvons pas rechercher si elles agissent nécessairement.*

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第4文

また逆に認識は既知のものから始まるのでもある *Umgekehrt auch fängt es mit dem Bekannten an ;*

「変遷の諸原因（諸要因）」が「未知のもの」であり、「認識がその未知であることから始まる」（前文）なら、「変遷の諸原因をそれらの種々相において探究してきたのではない」とき認識は始まらないのか。そうではない。「変遷の諸原因をそれらの種々相において探究してきたのではない」ということは、探究がいわば知っている相から始まることである。つまり「認識は既知のものから始まるのでもある」。だがそうであれば、「変遷の諸原因が必然的に働くかどうか〔変遷が必然的であるかどうか〕を探究することはできない」。というのは、「必然性の規定態は、必然性が自分の否定すなわち偶然性をそれのものにもっている、ということに存する」（WdL II S.213）が、しかし「認識が既知のものから始まる」その限り、そこに偶然性は存しないからである。

(63) 連続性の諸原因については、アプリアリに観察の射程内にある。Tant qu'il s'agit des causes de la continuité, elle suivra la portée de l'observation *a priori*.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 5 文

これは同語反復的な命題である *dies ist ein tautologischer Satz* ;

さて変遷の諸要因が探究されないのだから、或るものは「変遷」せずに「連続」する。つまり「或るものは或るものである」が、すると「これ〔認識（知る運動）は既知のものから始まる〕は同語反復的な命題である」。同語反復であるのだから、「連続性の諸原因〔或るものが或るものであるその諸原因〕については、アプリアリに〔或るものの〕観察の射程内にある」と謂うのである。

(64) 時間を通じての変遷の場合には、諸辞項と諸価値の総体的な関係のずれのほかは叙述しないほうがよい、それゆえ必然性の程度をつまびらかにすることは断念する。Quand il s'agit de l'altération à travers le temps, mieux vaut ne parler que du déplacement du *rapport global* des termes et des valeurs, par conséquent en renonçant à se rendre compte du degré de nécessité.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 6 文

— 認識がそれでもって始まるもの、したがって認識が現実^にに認識しているものは、まさにこの「認識が始まっているという」ことによって既知のものである *das, womit es anfängt, was es also wirklich erkennt, ist eben dadurch ein Bekanntes* ;

「時間を通じての変遷」を認識する場合に「諸辞項と諸価値の総体的な関係のずれのほかは叙述しない」のであれば、「認識がそれでもって始まるもの、したがって認識が現実^にに認識しているもの」は当の「諸辞項と諸価値の総体

的な関係のずれ」である。それは「まさにこの〔認識が始まっているという〕ことによって既知のものである」。

以上を次のように述べることもできる。「変遷の諸原因が必然的に働くかどうかを探究することはできない」（前文）以上、「変遷」は「ただ可能的にすぎない」（WdL II S.205）。その「可能的にすぎない」ものに対しては、「それの他者ないしは反対のもの *Gegenteil* がまた同じく存在する」（*ibid.*）が、その「反対のもの」——「可能的であるもの」の反対のものたる「現実的なもの」——こそ「認識が現実認識している」ところのもの・「諸辞項と諸価値の総体的な関係のずれ」である。そしてこの「可能性と現実性との統一は偶然性である」（*ibid.* 傍点は引用者）ゆえ、「時間を通じての変遷」における「必然性の程度をつまびらかにすることは断念する」のである。なお、「（変遷の）可能性と（関係のずれの）現実性との統一」が「偶然性」において与えられることについては、CLG の叙述が参考を供する。

<CLG> それゆえ創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じると思うのは誤りである；その要素はとうに与えられている。わたしがいま *in-décor-able* のような語をこの場で作ったとすれば、それはすでに言語のなかに陰然と存在するのである；そのすべての要素は、*décor-er*、*décor-ation*；*pardonn-able*、*mani-able*；*in-connu*、*in-sensé*、etc. のような統合のなかに見出される；そしてその言のなかにおける実現は、それを形成する可能性に比べれば、取るにたらぬ事実である。et sa réalisation dans la parole est un fait insignifiant en comparaison de la possibilité de le former. (p.231)

（65）本章の終りまで辿られた宿次は次である：1⁰）事柄の定義：言語活動において言語は言から引きだされている。Les étapes suivies jusqu'à la fin du chapitre sont les suivantes：1⁰）Définition de choses：dans le langage la langue a été dégagée de la parole.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 7 文

まだ認識されておらず・のちになってはじめて認識されるべきものはまだ未知のものである。was noch nicht erkannt worden und erst später erkannt werden soll, ist noch ein Unbekanntes.

「事柄の定義」というとき、「(定義される) 事柄」は「未知のもの」である。というのは、「定義は、対象をその概念へと導き返す」(WdL II S.512) のであり、すると「(定義される) 事柄」は「(その概念において) まだ認識されておらず・のちになってはじめて認識されるべきもの」だからである。かくして「言語活動において言から引きだされている」と「定義」される「言語」は「事柄」である。それが「引きだされる・明らかにされる *dégagé*」ことは「その概念へと導き返される」ことだからである。

(66) 言語活動から言にすぎないもののすべてを除くと、残りは本来的に言語と呼ばれるものであり、心理的な辞項しか含まないことが分かる。Quand on défalque du langage tout ce qui n'est que parole, le reste peut s'appeler proprement *langue* et se trouve ne comprendre que des termes psychiques.

<大> a 分析的認識 1 パラグラフ 第 8 文

その限りでは認識は、それがひとたび始まってしまえば、つねに既知のものから未知のものへと進む、といわざるをえない。Man muß insofern sagen, daß das Erkennen, wenn es einmal angefangen hat, immer vom Bekannten zum Unbekannten fortgehe.

「言語活動から言にすぎないもののすべてを除く」——つまり言語が言から解放される *dégagé*——いとなみにおいて、「認識」はすでに「始まっている」。そして「それがひとたび始まってしまえば、認識はつねに既知のものから〔概念へと導き返されるべく〕未知のものへと進む」から、「(言を除いた) 残り」す

なわち「心理的な辞項しか含まない」ところの「本来的に言語と呼ばれるもの」は「未知のもの」である。

(67) 言語＝観念と記号との心理的な結びつき。La langue = nœud psychique entre idée et signe.

<大> a 分析的認識 2 パラグラフ 第 1 文

分析的認識を「総合的認識から」識別するゆえんのものは次のことまではすでに規定されている、[すなわち] 全体の推論の第一の前提としての分析的認識には媒介はまだ属しておらず、分析的認識は概念の直接的な・他在をまだ含んでいない伝達であって、この伝達においては活動性は自分の否定態を失っている、というところまでは。Das Unterscheidende des analytischen Erkennens hat sich bereits dahin bestimmt, daß ihm als der ersten Prämisse des ganzen Schlusses die Vermittlung noch nicht angehört, sondern daß es die unmittelbare, das Anderssein noch nicht enthaltende Mitteilung des Begriffes ist, worin die Tätigkeit sich ihrer Negativität entäußert.

「心理的な辞項しか含まない」と説いたことを承けて、「言語＝観念と記号との心理的な結びつき」である。その「言語」は上述のように「未知のもの」だが、その認識について「次のことまではすでに規定されている」。以下では、「行けられる」を発した 30 代男の認識を例に述べよう。

30 代男は「行けられる」でもって『『行くことができる』という『可能』のニュアンスを伝えたかった。「行ける」では『『can』のニュアンスはこもっていない気がした』からである。つまり「行けられる」は「観念[理念] idée と記号との心理的な結びつき」だが、するとそれはすでに「言語」である。

さて「行けられる」を聞いて、脚本家は「どうです、この日本語。『行けられる』ですよ、『行けられる』と慨嘆した。つまり「行けられる」で『『行くことができる』という『可能』のニュアンスを伝える』という 30 代男の「認

識」は、「概念の直接的な・他在をまだ含んでいない伝達⁽¹⁾」であって、この伝達においては活動性は自分の否定態を失っている」——「行けられる」の表現（活動性）が聞手の理解（自分の否定態）を失っている *sich entäußert* ——。そして「否定態」は「規定態」であるから、'*sich entäußern*'は「自己を疎外する」である。つまり確かに「言語＝観念（「can」のニュアンス）と記号との心理的な結びつき」なのだが、「行けられる」には「媒介はまだ属していない」。そして「媒介」を欠いた「結びつき」であるゆえ「自己を疎外する」のである。

（68）しかしそれは社会的現実の外なる言語でしかなく、（言語の実在性の一部しか含まないので）非実在的である。Mais ce ne serait là que la langue hors de sa réalité sociale, et irréelle (puisque ne comprenant qu'une partie de sa réalité).

<大> a 分析的認識 2 パラグラフ 第2文

とはいえ関係のあの直接態はそれ自身が媒介である、なぜかならばこの直接態は概念の客観への否定的関係であるが、しかしこの否定的関係が自己自身を否定し、そして否定することによって自己を単一かつ同一的ならしめているのだからである。Jene Unmittelbarkeit der Beziehung ist jedoch darum selbst Vermittlung, denn sie ist die negative Beziehung des Begriffs auf das Objekt, die sich aber selbst vernichtet und sich dadurch einfach und identisch macht.

上には「観念と記号との心理的な結びつき」に「媒介はまだ属していない」とされたが、ここでは「とはいえ関係〔結びつき〕のあの直接態はそれ自身が媒介である」と説かれる。

30代男の発した「直接態」（行けられる）は「自分の否定態を失っている伝達」であった。その「否定態」は表現に対する理解であるから、その「（聞手の）理解」を失っている伝達は「社会的現実の外なる言語でしかない」。そして「社会的現実」すなわち「客観」であるから、「社会的現実の外なる言語」

(直接態「行けられる」)は「概念[「～することができる」]の客観への否定的関係」である。そして「この否定的関係が自己自身を否定する」。「自分の否定態」は「自分の規定態」であったから、「自分の否定態を失う」ことは「自己自身を否定する」ことであり、「第3回講義」に即しては「言語」(行けられる)が「言語(自己)の实在性の一部しか含まない」のである。CLGに謂う(一部再掲)。

<CLG> 言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない;そして進化現象はすべてその根源を個人[・]の区域にもつ。この原理は……(中略)……かくべつ類推的改新に適用される。*honor*が*honōs*に取って替わりうる競争者となる前には、最初の話手がこれをその場で作り、他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくすることが、必要であった。(p.235)

だが「行けられる」はいまだ「慣用」に到っていない。つまりそれは「(自己自身を)否定することによって自己を単一かつ[「行ける」と]同一的ならしめている」。「行けられる」を「途方もない言葉」と断ずる脚本家がなお30代男の発話を理解するゆえんであり、そこで「あの直接態(行けられる)はそれ自身が媒介である」と謂われる。

(69) 言語が存在するためには、その言語を話す大衆が必要である。Pour qu'il y ait langue, il faut une masse parlante se servant de la langue.

<大> a 分析的認識 2 パラグラフ 第3文

この自己内反省は主観的なものにすぎない、というのはこの反省の媒介においては区別はまだ前提された即自[・]存在的な区別として・客観[・]の自己における差異性として現存しているのだからである。Diese Reflexion-in-sich ist nur ein Subjektives, weil in ihrer Vermittlung der Unterschied nur noch als der vorausgesetzte *ansichseiende*, als Verschiedenheit des *Objekts* in

sich, vorhanden ist.

「自己を単一かつ同一的ならしめている」を承けて『大論理学』は「自己内反省」と謂い、ゆえにそれはいま「直接態それ自身が媒介である」ことである。そして「この反省の媒介においては区別はまだ前提された即自存在的な区別〔本来的ではあるがまだ展開されていない区別〕として・客観の自己における差異性として現存している」から、「この自己内反省は主観的なものにすぎない」。

例に即して述べよう。「区別」が「前提された即自存在的な区別」であることは、「行けられる」が「途方もない maßlos 言葉」・すなわち「没度量的なもの das Maßlose」であることに示される。「没度量的なもの」において「諸々の自立態——「行ける」「行けられる」——は諸々の状態へとおし下げられる」(WdL I S.444) からである。だが「没度量的なもの」のそうした展開は先のことであり、だからここは「前提された即自存在的な区別」である。また「区別」が「客観〔社会的現実〕の自己における差異性」であることは、脚本家が「行けられる」を正用の誤用（「行ける」の自己における差異性）と解していることに示される。なおここで「主観的」とは「一面的」「形式的」ないし後出する「われわれにとって」の謂いであり、つまり客観性のもつ総体性——例に即しては、話手の表現を聞手が理解するという言語の総体性——を欠いていることを謂う。

「第 3 回講義」では、「社会的現実の外なる言語」は「非実在的である」ので「言語が存在するため」の「必要」が「反省」される。「必要である il faut」は「当為 Sollen」であり、だから「必要」とされる「話す大衆の言語」は「即自存在的」である。換言すれば「言語」（行ける）と「話す大衆の言語」（行けられる）との「区別はまだ前提された即自存在的な区別〔本来的ではあるがまだ展開されていない区別〕として・客観の自己における差異性として現存している」。このように「言語が存在するためには、その言語を話す大衆が必要である」という「反省は〔そうした言語は即自存在的であるので〕主観的なものにすぎない」。

(70) われわれにとって言語は直ちに集団的な精神のなかにある。La langue pour nous résidait d'emblée dans l'âme collective.

<大> a 分析的認識 2 パラグラフ 第4文

それだからこの関係によって成立する規定は単一な同一性・抽象的な普遍性という形式である。Die Bestimmung, die daher durch diese Beziehung zustande kommt, ist die Form einfacher *Identität*, der *abstrakten Allgemeinheit*.

「われわれにとって pour nous ; für uns」は例えば次のように用いられる。

<大> 本質は存在の自己内還帰としてこの純粋な否定態であり、それだから本質はそれ自体では・換言すればわれわれにとっては an sich oder für uns、存在がそのなかでは解消されている根拠として規定されている。だがこの規定態は本質そのものによって定立されているのではない、換言すれば本質は、そのこの規定態をみずから定立したのではないまさにその限りで、根拠ではないのである。(WdL II S.80)

『大論理学』の「この関係」を例に即して言えば、「行けられる」が「正用の誤用」と解されることである。そして「この関係によって成立する規定」は für uns であって、für es ではない。というのは、「行けられる」は30代男の発した「途方もない言葉」にすぎず、「本質そのものによって定立されているのではない」・換言すれば「言語 langue」(本質)がその「根拠ではない」からである。そして「根拠」すなわち「実在的な媒介」(WdL II S.81)を欠いた「規定は単一な「[行ける]との」同一性・抽象的な普遍性という形式である」。

「直ちに d'emblée」とは媒介されていない・媒介を欠くことを謂うのだから、「言語は直ちに集団的な精神のなかにある」という「規定は単一な同一性・抽象的な普遍性という形式である」。いま「言語」が「われわれにとって」であるゆえんである。

(71) この第二の事実が定義に含まれる Ce second fait rentre dans la définition ;

<大> a 分析的認識 2 パラグラフ 第 5 文

分析的認識はそれだから一般にこの同一性を自分の原理としてもっており、他者への移行・差異されたものの結合は分析的認識それ自身から・その活動性からしめだされているのである。Das analytische Erkennen hat daher überhaupt diese Identität zu seinem Prinzip, und der Übergang in Anderes, die Verknüpfung Verschiedener ist aus ihm selbst, aus seiner Tätigkeit ausgeschlossen.

『大論理学』に謂う「この同一性」は「単一な einfach 同一性」であり、そこで「他者への移行・差異されたものの結合は分析的認識それ自身から・その活動性からしめだされている」。30 代男の認識に即して説いてみよう。「日常的に『ら抜き』で話している彼にとって、『行ける』に『can』のニュアンスはこもっていない」、そうではなくて『行くことができる』という『可能』のニュアンスを伝える」のは「行けられる」なのである。このように「認識は[「行けられる」]のこの(単一な)同一性を自分の原理としてもっており、だからこそ「行けられる」が「咄嗟に出た」のである。つまりそこでは、「(自分以外の) 他者への移行・[すなわち] 差異されたものの結合 — 「行ける」と「行けられる」の結合 — は認識それ自身から・その活動性からしめだされているのである」。「没度量的なもの」に関して上述した課題 — 自立態が状態へとおし下げられる — はまだ実現していない。

「第 3 回講義」に直接対応する CLG の叙述は「それ[言語]の社会的性質はそれの内的特質の一つである Sa nature sociale est un de ses caractères internes」(p.110. 傍点は引用者)と説き、それゆえここでの「定義に含まれる」の謂いも、言語が「第二の事実」を「自分の原理としてもっている」ことである。その「第二の事実」は「言語が直ちに集団的な精神のなかにある」ことであり、30 代男の「分析的認識」においては「行けられる」がその「言語」である。それゆえ「第二の事実が定義に含まれる」とは、「観念」(「can」

のニュアンス) に結びついている「記号」が「行けられる」の他にないということである。つまりそれと「行ける」との「結合はその活動性からしめだされている」。

(72) これは言には当てはまらない(言行為は個人的である)。il ne s'applique pas à parole (les actes de parole sont individuels).

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第1文

さて分析的認識はよりくわしく考察するならば、前提された対象から、またそれとともに個別的な・具体的な対象から始まる、その対象は表象にとってすでにできあがった対象であつてもよいし、またそれは課題であつてもよい、その諸事情と諸制約においてのみ与えられていて・それらからまだ独立して現われ出ておらず・単一な自立態において表わし示されていないのであつてもよい。Das analytische Erkennen nun näher betrachtet, so wird von einem vorausgesetzten, somit einzelnen, konkreten Gegenstande angefangen, er sei nun ein für die Vorstellung schon fertiger, oder er sei eine Aufgabe, nämlich nur in seinen Umständen und Bedingungen gegeben, aber aus ihnen noch nicht für sich herausgehoben und in einfacher Selbständigkeit dargestellt.

話手(30代男)の「分析的認識」がその発話から「始まる」ことはよからう。したがって発話(言)は「前提された対象」であり、「またそれとともに個別的な・具体的な対象」である。それは「[話手の] 表象にとってすでにできあがった対象であつてもよい」が、これは「『～することができる』という『可能』のニュアンスを伝えたかった」30代男にとって「『can』のニュアンスがこもっている」のは「行けられる」であることを謂う — 'fertiger'の仏語訳 'achvé'の使用例に次がある: 「類推作用がいったんできあがってしまうと l'action analogique une fois achevée、旧状態(honōs: honōrem)と新状態(honor: honōrem)とは外見上、音の進化から生じたものと同じ対立をなしている」(CLG p.228) —。

またそれは「他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくする」(再掲)という「課題」であってもよいが、これは「行けられる」が「[他人による模倣・反復という] その諸事情と諸制約においてのみ与えられていて・それらからまだ独立して現われ出ておらず・[すなわち慣用という] 単一な自立態において表わし示されていないのであってもよい」ということである。

このように「～であれ、また～であれ～ es sei, ~ es sei」と謂われるが、しかしこれが「言語」に関する「くわしい考察」であることを失念してはなるまい。「言行為は個人的である」のであって、あくまで「これ[集団的な精神のなかにあること]は言には当てはまらない」。つまり 30 代男の「行けられる」は「途方もない言葉」ではあるものの、脚本家(聞手)によって理解されている ― つまり「具体的」である ―。その限り「行けられる」も確かに「集団的な精神のなかにある」。では「言語」とは言えない「言行為」とは、いかなるものか。ウィトゲンシュタインの次の叙述が示唆を与える(「ノルウェーでムーアに対して口述されたノート」)。

例えば、「プラトン ソクラテス」が意味をもつかに見えるが、「アブラカダブラ ソクラテス」は全然意味をもたないと疑われる理由は、「プラトン」が意味をもつことをわれわれが知るものの、句全体が意味をもつために必要なことは、「プラトン」が意味をもつということであなく、「プラトン」が一つの名の左にあるという事実が意味をもつことだ、ということにわれわれが気づかないからである。

同じく、30 代男が「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べてアブラカダブラ」と言ったとすれば、脚本家は「この途方もない言葉」と慨嘆することもできなかったろう。「行けられる」と異なり、「アブラカダブラ」は「行ける」の左にあることができないからである。

(73) 定義によってわれわれは直ちに自身を二つの事柄の前に置く。Par la

définition, nous nous plaçons d'emblée devant les deux choses.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第 2 文

さてそのような対象の分析とは、その対象が含みうる特殊な諸表象へとその対象がたんに解体されることにはありえない Die Analyse desselben kann nun nicht darin bestehen, daß er bloß in die besonderen Vorstellungen, die er enthalten kann, aufgelöst werde ;

『大論理学』では前パラグラフ最後の文（本稿 71）で「他者への移行・差異されたものの結合は分析的認識それ自身から・その活動性からしめだされている」と説かれ、また前文（本稿 72）で「分析的認識は前提された対象から始まる」と説かれた。すると「対象の分析」とはその「前提された対象が含みうる特殊な諸表象へとその対象がたんに解体されること」のように見えるだろう。だが『大論理学』は「対象の分析とは、対象がたんに解体されることにはありえない」と説く。

「第 3 回講義」の説くところも、一見「解体」と見紛うものである。というのは、「われわれが直ちに自身を二つの事柄の前に置く」のであるから、「二つの事柄」は直接「われわれ」の「前に置かれたもの」・「表象 Vor-stellung」である。例に即して言えば、30 代男は「自身を二つの事柄の前に置いている」。「行ける」（すでにできあがった対象）には『『can』のニュアンスがこもっていない』（事柄 1）、「行けられる」は『『～することができる』という『可能』のニュアンスを伝える』（事柄 2）、これである。すると「[30 代男の] 分析」において、「対象が含みうる特殊な諸表象 [二つの事柄] へとその対象がたんに解体された」かのようなのである。だがそうではない。

いま「定義」は「言語＝観念と記号との心理的な結びつき」（本稿 67）であり、だから定義される「対象」は「言語」である。そしてその「定義」には「第二の事実」（本稿 71）・すなわち「言語は直ちに集団的な精神のなかにある」（本稿 70）ということが含まれている。「第 3 回講義」に即して「分析」と「解体」とを把握する要点はここにあり、むしろ一見見紛うような点を押さえることで、「言語」の「言」からの「引きだし dégage-ment」が進展する

— すなわち次文の「かくして」 —。

(74) かくして次の図 Ainsi ce schéma :



<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第3文

そのような解体と解体による把握とは認識に属する仕事ではなくて、ただたんによりくわしい知識に・[すなわち]表象作用の領域内の規定にかかわる仕事である。eine solche Auflösung und das Auffassen derselben ist ein Geschäft, das nicht zum Erkennen gehörte, sondern nur eine nähere *Kenntnis*, eine Bestimmung innerhalb der Sphäre des *Vorstellens* betreffe.

「第二の事実」を含んでいる「定義」においては「言語」と「話す大衆の言語」とが存するので、この「図」である。もし 30 代男の発話が「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べてアブラカダブラ」であったならそれは「集団的な精神のなかにない」発話として「解体と解体による把握」であり、その場合には 30 代男の「仕事」は確かに「ただたんによりくわしい知識に・[すなわち]表象作用の領域内の規定にかかわる仕事である」だろう。すなわち、「行ける」には『can』のニュアンスがこもっていない」というたんなる「表象作用」が披歴されただけであり、だからこそ聞手にとっては意味不明になる。。

(75) この図とともに、言語は生きうべきものである。Avec ce schéma la langue est viable.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第 4 文

分析は、概念を根底にもっているのであるから、本質的に概念諸規定を、しかも実に直接的に対象のなかに含まれている諸規定としての概念の諸規定を自分の所産としてもつのである。Die Analyse, da sie den Begriff zum Grunde hat, hat zu ihren Produkten wesentlich die Begriffsbestimmungen, und zwar als solche, welche *unmittelbar* in dem Gegenstande *enthalten* sind.

「解体 Auflösung」が「認識に属する仕事ではない」のに対して、「分析」は認識の仕事である。すなわち、「概念を根底〔根拠〕にもっている」分析が「本質的に概念諸規定を自分の所産〔生産物〕としてもつ」ことは、——「概念の諸規定」は「概念」なのだから——要するに「概念が概念を自分の所産としてもつ」ことにほかならない。するとそれは——「人間が人間を自分の所産としてもつ」ように——「生命 Leben ; vie」である。ただしその「所産」は「実に直接的に〔非媒介的に〕対象のなかに含まれている諸規定としての概念の諸規定」であるから・つまり生殖細胞（精子・卵）同様の即自的ないし可能的な生命であるから、「第 3 回講義」は「生きうべき」と謂う——この限り CLG に「しかしこれらの条件下にあつては、言語は生きうべきものではあるが、生きてはいない Mais dans ces conditions, la langue est viable, non vivante」(p.110) とあるのは、編者による正確な補遺だと言える⁽²⁾——。そして「言語が生きうべきものである」ならば、『言葉は生きもの。変化は当然』を猛省する必要がある」という脚本家の言説も相対化されるだろう——無論これは「行けられる」に対する好悪の感とは別の次元である——。

(76) 定義自体が社会的実在性を考慮しているが、史実実在性はまだまだまったく考慮されていない。La définition même tient compte de la réalité sociale, mais elle ne tient pas compte du tout encore de la réalité historique.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第 5 文

主観的概念の活動性は、一方の側面からすれば、もっぱら客観のなかにす

で存在しているものの展開とみなされざるをえない、というのは客観そのものが概念の総体性にほかならないからである、ということは認識の理念の本性からすでに明らかにされたところである。Es hat sich aus der Natur der Idee des Erkennens ergeben, daß die Tätigkeit des subjektiven Begriffs von der einen Seite nur als *Entwicklung* dessen, *was im Objekte schon ist*, angesehen werden muß, weil das Objekt selbst nichts als die Totalität des Begriffs ist.

言語交通している「行けられる」が、しかし「生きうべきものではあるが、生きてはいない」と謂われるのはなぜか。「行けられる」は伝承形 *forme transmise* たる「行ける」の競争者 *concurrent* であり、その形成について CLG は次を説く。

<CLG> 人はとかく「行けられる」を、「行ける」の変更、「音相変形」と考えたがる；それはこのあとの語からその実体のおおかたを引きだしたに相違ない、と思う。あにはからんや、「行けられる」の産出にあたって何一つしない唯一の語形はといえば、当の「行ける」なのである。(p.228. 例は変えてある)

そして伝承形が何一つしないのだから、「行けられる」の「産出 [生殖] *génération*」すなわち 30 代男の類推的創造は「主観的概念の活動性」にすぎない。

その類推的創造については次が説かれる (再掲)。

<CLG> 創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じると思うのは誤りである；その要素はとうに与えられている。わたしがいま *in-décor-able* のような語をこの場で作ったとすれば、それはすでに言語のなかに陰然と存在するのである；そのすべての要素は、*décor-er*、*décor-ation*；*pardonn-able*、*mani-able*；*in-connu*、*in-sensé*、etc. のような統合のなかに見出される；

「行けられる」についても別のことでなく、その比例四項式はすでに挙げたように

食べる：食べられる＝行ける：x

x＝行けられる

であった。そして「行けられる」が「すでに言語のなかに陰然と〔可能的に〕*en puissance* 存在する」のだから、その創造も「もっぱら客観のなかにすでに存在しているものの〔可能的な〕展開とみなされざるをえない」。すなわち「そのすべての要素 *tous ses éléments* が、行か・ない、行け・ば；食べ・られる、避け・られる、etc. のような統合のなかに *dans les syntagmes* 見出される」のであり、換言して「客観そのものが概念の総体性にほかならない」のである⁽³⁾。

「行けられる」が「客観〔言語〕のなかにすでに存在している」のだから、「定義自体は社会的実在性（客観）を考慮している」。実際「言語は直ちに集団的な精神のなかにあり」（本稿 70）、「この第二の事実が定義に含まれる」（本稿 71）のであった。けれどもその「客観そのものが概念の総体性にほかならない」のであれば、他に「考慮される」ものは存しない。「史の実在性がまだまったく考慮されていない」のはそのためである。なお '*was im Objekte schon ist*' と '*un mot existe déjà en puissance dans la langue*' との構文的な親近に注目すれば、「主観的概念の活動性」が「客観のなかに陰然と存在する」ことが了解されよう。

（77）能記は本来恣意的なものだから、このように定義された言語を自由な体系として捉えることを妨げるものは何もない、また言語は諸関係の純粋な領域で作用する論理的な原理にのみ依存する。*Comme le signifiant est de sa nature arbitraire, prenant la langue ainsi définie, il semble que rien n'empêche de la prendre comme un système libre, ne dépendant que de principes logiques, se mouvant dans la sphère pure des rapports.*

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第6文

「とはいえ」そこに生じてくる諸規定はただ対象から取り出されるだけであると思うのが一面的であるように、あたかも対象のなかへと持ち込まれたのではないものは対象のなかに何一つ存しないかのように分析を表象するのも一面的である。Es ist ebenso einseitig, die Analyse so vorzustellen, als ob im Gegenstande nichts sei, was nicht in ihn *hineingelegt* werde, als es einseitig ist, zu meinen, die sich ergebenden Bestimmungen werden nur aus ihm *herausgenommen*.

「主観的概念の活動性」が「客観のなかに陰然と存在する」ので「とはいえ」と承ける。その『大論理学』は原文と訳文とで主節従属節の順序が逆である。それゆえ、「能記は本来恣意的なものである」ということの二面性を説く「第3回講義」との対応も注意を要する。なお「第3回講義」がここで説く「言語」は、「このように〔すなわち、「社会的実在性を考慮しているが、史実在性はまだまだ考慮されていない」と〕定義された言語」である。

第一に、「史実在性を考慮しない」ということは「先立つ世代からの〔言語の〕相続」(CLG p.103)を考慮しないということだから、すると「能記は本来恣意的なものだから、このように〔史実在性を考慮しないと〕定義された言語を自由な体系として捉えることを妨げるものは何もない」かに思われる。そしてこれは「対象のなかへと〔自由に〕持ち込まれたのではないものは対象のなかに何一つ存しない」ということにほかならない。だがこれは「一面的である」。

第二に、「言語が諸関係の純粋な領域で作用する論理的な原理にのみ依存する」のであれば、「主観的概念の活動性」において「そこに生まれる *sich ergebend* 諸規定はただ対象から取り出されるだけであると思う」かもしれない、事実「行けられる」の「すべての要素は統合のなかに見出される」のであった — なお「諸関係」とは統合関係と連合関係とである — 。だがこれも「一面的である」。

(78) 話す大衆という事実それ自体はこの見方を妨げるだろうか。Est-ce que le fait en soi de la masse parlante empêcherait ce point de vue?

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第7文

周知のように主観的観念論はあとの考えを述べている、すなわちこの観念論は、分析において認識の活動性のもっぱら一面的な定立する運動であって、この運動の彼岸において物自体はかくれたままにとどまっている、というようにとらえている Jene Vorstellung spricht bekanntlich der subjektive Idealismus aus, der in der Analyse die Tätigkeit des Erkennens allein für ein einseitiges Setzen nimmt, jenseits dessen das *Ding-an-sich* verborgen bleibt ;

「この見方」とは「言語を自由な体系として捉える」・すなわち「史的实在性を考慮せずに、言語を自由な体系として捉える」、その見方であるから、『大論理学』に即しては「認識の活動性のもっぱら一面的な定立する運動である」という「主観的観念論」の考えである。すると「この〔定立する〕運動の彼岸において物自体がかくれたままにとどまっている」のと同じように、「この運動 — 例えば 30 代男（話す大衆）の「行けられる」を発する運動 — の彼岸において言語はかくれたままにとどまっている」だろう。「話す大衆」が自由に何を発しようと、「言語」は影響されないだろうからである。そしてそのように「とどまっている」言語は変遷しない。そこで「話す大衆がいるという事実それ自体はこの見方 — 「言語は自由な体系である」という見方 — を妨げるか」と疑うのである。

(79) 必ずしもそうではない — それだけを単独で採り上げるなら。Pas précisément — tant qu'on le prend tout seul.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第8文

他方の考えはいわゆる实在論に属する、そして实在論は主観的概念を思想

の諸規定を外から自己のうちへとうけいれる空虚な同一性である、というようにとらえている。die andere Vorstellung gehört dem sogenannten Realismus an, der den subjektiven Begriff als eine leere Identität erfäßt, welche die Gedankenbestimmungen *von außen* in sich *aufnehme*.

「主観的概念は思想の諸規定を外から自己のうちへとうけいれる空虚な同一性である」という「實在論」の考えは、これを「言語」に即して言えば「言語は諸関係の純粋な領域で作用する論理的な原理にのみ依存する」ということである。だがこれは主観的観念論とは真逆に一面的であり、このことによって主観的観念論の一面性を否定する側面をもつ。

そこで「第3回講義」も、「それ〔話す大衆という事実〕だけを単独で採り上げるなら」ば、「必ずしもこの見方〔言語は自由な体系である〕を妨げない」と謂う。ただし「それだけを単独で採り上げる」ことが一面的であることは言うまでもない。

(80) 共同体は論理的に・あるいは論理的にのみ考えるのではないから、言語は心理・論理的な原理に依存しよう。Comme une communauté ne pense pas logiquement ou uniquement logiquement, la langue dépendrait de principes psychologico-logiques.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第9文

— 分析的認識・[すなわち] 与えられた素材の論理的諸規定への転化とは、[前述の]両者が一つのもののうちにあることであるということが、[すなわち]それは定立する運動であるが、しかしこの定立する運動がまたまさに直接的に前提する運動として規定されているそのような定立する運動であるということが示されたのであるから、論理的なものは後者[前提する運動であること]のゆえに対象のなかにすでにできあがっているものとして現われることができるが、同様にまた前者[定立する運動であること]のゆえにたんなる主観的な活動性の所産として現われることもできるのである。Da das analytische

Erkennen, die Verwandlung des gegebenen Stoffes in logische Bestimmungen, sich gezeigt hat, beides in einem zu sein, ein *Setzen*, welches sich ebenso unmittelbar als *Voraussetzen* bestimmt, so kann um des letzteren willen das Logische als ein schon im Gegenstande *Fertiges* sowie wegen des ersteren als *Produkt* einer bloß subjektiven Tätigkeit erscheinen.

関連する CLG の叙述は次である。

<CLG> もちろん集団心理学とても、純然たる論理的資料を扱いはしない；個人間の実践的關係において理性をたわめるものすべてを参酌せねばならないであろう。(p.110)

つまり「論理的」に対する「心理的」とは、「理性をたわめるもの *ce qui fait fléchir la raison*」として「経験的」の謂いである。そして前者「論理的（にのみ）」は「言語は諸關係の純粋な領域で作用する論理的な原理にのみ依存する」（本稿 77）という一面だから、『大論理学』との関連では「前提する運動」に対応し、これに対して後者「心理的」は「定立する運動」に対応する。そしてここでの要点は「両者が一つのもののうちにある」ということだから、「言語は心理・論理的な原理に依存する」と説かれる。

本稿での例に即して言えば、「行けられる」（論理的なもの）は一面で「対象のなかにすでにできあがっているものとして現われることができる」が——「すでに言語のなかに陰然と存在する」——、同様にまた他面で「たんなる主観的な活動性の所産として現われることもできる」のである——「最初の話手がこれをその場で作る *l'improviser*」。*'improviser'*：「即興的に作る」、「行けられる」が「咄嗟に出た」ように——。

(81) しかし外的な実在性は時間要因を離れて或る一時点において言語事実を考察するとき、社会的大衆のなかに現われるそのように、生まれる機会

をもたない。Mais les réalités extérieures comme celles qui se manifestent dans une masse sociale, n'ont pas occasion de se produire quand on considère les faits de langue hors du facteur temps, dans un seul point du temps.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第 10 文

だが両方の契機は分離されるべきではない Aber beide Momente sind nicht zu trennen ;

関連する CLG は次である。

<CLG> [時間的] 接続の外にでるときは、言語的実在は完全ではなく、どのような結論もくだすことができない。(p.110)

つまり「第 3 回講義」の「外的な実在性」とは「言語的実在性」であり、「時間要因」は「[時間的] 接続」の謂いである。

さて、「両方の契機 [前提する運動・定立する運動] は分離されるべきではない」。これを「第 3 回講義」に即して言えば、「時間要因を離れて [の外で] hors de 或る一時点において言語事実を考察する」ことの戒めである。そのように「考察する」ならば、「外的な実在性は、社会的大衆のなかに現われるそのように、生まれる se produire ; sich ergeben 機会をもたない」からである。つまり「社会的大衆のなかに現われる外的な実在性」が「生きうべき」にとどまった（本稿 73～76）ように、である。

(82) しかしここに時間という史の実在性が介入する。Mais ici intervient la réalité historique du temps.

<大> a 分析的認識 3 パラグラフ 第 11 文

分析は論理的なものを抽象的な形式へと取り出すが、自分のこの抽象的な

形式においては論理的なものはもっぱら認識のうちにのみ現存している、だが同様にまた逆に論理的なものはたんに定立されたものであるだけではなくて即自的に存在するものである。das Logische ist in seiner abstrakten Form, in welche es die Analyse heraushebt, allerdings nur im Erkennen vorhanden, so wie es umgekehrt nicht nur ein *Gesetztes*, sondern ein *Ansichseiendes* ist.

「言語」であるところの「行けられる」が「途方もない言葉」である理由が説かれる。30 代男の「分析は論理的なもの（言語）を抽象的な形式へと取り出す（強調する）herausheben」。すなわち、「行ける」に『can』のニュアンスはこもっていない気がした」ので、「行けられる」で強調したという次第。そして「自分のこの抽象的な形式においては論理的なもの（言語）はもっぱら[30 代男の]認識のうちにのみ現存している」ので、聞手にとっては「途方もない言葉」なのである。けれども「言語の進化が宿命的である」（CLG p.108）・換言して「時間という史実の介入性」からには、「また逆に論理的なものはたんに[30 代男によって]定立されたもの[取り出されたもの]であるだけではなくて即自的に存在するもの[したがって進化するもの]である」だろう。

(83) 話す大衆抜きに時間を採り上げても、おそらく外的な変遷の如何なる効果もあるまい。Si l'on prenait le temps sans la masse parlante, il n'y aurait peut-être aucun effet externe d'altération.

<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第1文

さて分析的認識がいま示された転化であるその限りでは、それはつぎつぎになんらかの中間項をとおって進むのではなく、規定はその限りで直接的である、そして対象に固有にかつそれ自体で属しており・それだから主観的媒介なしに対象から把握さるべきであるという意義をまさに規定はもっている。Insofern nun das analytische Erkennen die aufgezeigte Verwandlung ist,

geht es durch keine weiteren *Mittelglieder* hindurch, sondern die Bestimmung ist insofern *unmittelbar* und hat eben diesen Sinn, dem Gegenstand eigen und an sich anzugehören, daher ohne subjektive Vermittlung aus ihm aufgefaßt zu sein.

『大論理学』に謂う「分析的認識」（与えられた素材の論理的諸規定への転化）の「いま示された転化〔変遷〕 *Verwandlung* ; *altération*」とは、「定立する運動がまたまさに直接的に前提する運動として規定されているそのような定立する運動である」（本稿 80）ということであった。このとき「論理的なものは即自的に存在するものである」（本稿 82）のだから、この運動は「つぎつぎになんらかの中間項をとおって進むのではなく、〔論理的〕規定はその限りで直接的である、そして対象に固有にかつそれ自体で属しており・それだから主観的媒介なしに対象から把握さるべきであるという意義をまさに規定はもっている」。

例に即して述べよう。『行けられる』の産出にあたって何一つしない唯一の語形（再掲）が「行ける」であることは上に述べた。「時間を採り上げる」といえば「つぎつぎになんらかの中間項をとおって進む」と思いがちだが、実は「行けられる」の創造に際して「行ける→行けられる」ということはないのである。「行けられる」は「その限りで直接的である」。むしろ「その要素はとうに与えられている *les éléments en sont déjà donnés*」（再掲）・換言して「対象〔言語〕に固有にかつそれ自体で *eigen und an sich* 属している」。そしてその「言語 *langue*」は「万人に共通であり、保管者の意志の外にありながら、各人めいめいのうちに在るなにか」（CLG p.34）なのだから、「話す大衆抜きに時間を採り上げて、おそらく外的な変遷の如何なる効果もあるまい」。というのは、かく「話す大衆」のすべてに「在る」ことで、「言語」の「分散された多様態はそれ自身のもとで自己を内化している *sich erinnert*」（WdL II S.122）からである。「行けられる」（規定）が「〔30 代男の強調という〕主観的媒介なしに対象から把握される」のはこのためである。

(84) 時間抜きの話す大衆：言語の社会的な力が時間を介入させるときにだけ現われることはいま見たところである。La masse parlante sans le temps : nous venons de voir que les forces sociales de la langue ne se manifesteront que si on fait intervenir le temps.

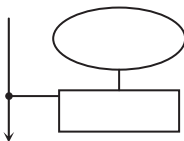
<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第2文

— しかし認識はさらに前進する運動・もろもろの区別されたものの展開でもあるべきである。Aber das Erkennen soll ferner auch ein *Fortgehen*, eine *Entwicklung von Unterschieden* sein.

「話す大衆抜きの時間 le temps sans la masse parlante」に対する「時間抜き話す大衆 la masse parlante sans le temps」であるので、『大論理学』は「しかし」と承ける。すなわち前文では「(論理的) 規定は対象に固有にかつそれ自体で属している」とされたが、ここでは「さらに前進する運動・もろもろの区別されたものの展開でもある」と謂う。

その「もろもろの区別されたもの」は例に即して「行ける」・「行けられる」であり、つまり「前進する運動」・「区別されたものの展開」は「言語の社会的な力」(社会的実在性)である — 「言語」と「話す大衆の言語」が存する「生きうべき言語」(本稿 75) — 。そして「言語の社会的な力が時間を介入させるときにだけ現われることはいま見たところである」(本稿 81)。

(85) われわれは次の図・すなわち時間軸を付加することによって完全な実在に達する Nous arrivons à la réalité complète avec ce schéma, c'est-à-dire en ajoutant l'axe du temps :



話す大衆が時間によって重ねられ、時間において考察される。La masse parlante est multipliée par le temps, considérée dans le temps.

<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第3文

だが認識はそれがここでもっている規定にしたがって没概念的かつ非弁証法的であるから、認識はただ与えられた区別をもっているだけであり、その前進する運動は素材の諸規定のもとでのみおこる。Weil es aber nach der Bestimmung, die es hier hat, begrifflos und undialektisch ist, hat es nur einen *gegebenen Unterschied*, und sein Fortgehen geschieht allein an den Bestimmungen des *Stoffes*.

『大論理学』に'hat es nur'・'allein'とある一方、「第3回講義」が'arrivons à la réalité complète'と説くことから、一見すると二つのテキストに齟齬があるかに思われる。しかしそうではない。「(われわれの) 認識がただ与えられた区別をもっているだけである」・したがってそれ以外をもたないのだから、その限りで認識の対象は「完全な実在」なのである⁽⁴⁾。ちなみに、いま「認識はそれがここでもっている規定にしたがって没概念的かつ非弁証法的である」、つまり総体性ではない。そして「完全な実在」——例えば「行ける」と「行けられる」の「与えられた区別」——とは「素材 *Stoffes* ; *matériau* の諸規定のもとでのみ」あることが、次の叙述によって示される。

<CLG> 変遷がどういうものであれ、一事のみは動かせない：関係のずれがあるのだ；音的資料 *la matière phonique* と観念とのあいだに別の対応が生じたのだ。(p.107)

「行ける」と「行けられる」もまた、「音的資料と観念[行くことができる]とのあいだの別の対応」であり、「重ねられている」。そしてそのような「[認識の] 前進する運動」はもちろん「時間軸」を必要とする。二つのテキストに齟齬はない。

(86) このときから、言語は自由ではない、なぜならまさにアプリアリに先行時代との無限の連帯によって、言語に関わる社会的な力がその効果を発揮

する機会を時間が与えるだろうから。Dès lors la langue n'est pas libre parce que même *a priori* le temps donnera occasion aux forces sociales intéressant la langue d'exercer leurs effets par la solidarité infinie avec les âges précédents.

<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第 4 文

[分析によって] 導きだされた思想の諸規定がなお具体的なものであるその限り、それらの諸規定は新たに分析されることができるのであり、そしてその限りでのみ認識は内在的な前進する運動をもつようにみえる Nur insofern scheint es ein *immanentes* Fortgehen zu haben, als die abgeleiteten Gedankenbestimmungen von neuem analysiert werden können, insofern sie noch ein Konkretes sind ;

『大論理学』に謂う「具体的なもの」は、「第 3 回講義」における「先行時代との無限の連帯」である — これに対して、30 代男の「行けられる」が抽象的な形式であったように、「抽象的なもの」は「連帯」を欠いている — 。つまりそうした「連帯によって、言語に影響する社会的な力がその効果を発揮する」のだが、これは換言して「諸規定がなお具体的なものであるその限り、それらの諸規定は新たに分析されることができる」ということである — 或る時代に後行する時代は、さらに後行する時代にとっての先行時代である — 。「そしてその限りでのみ認識は内在的な前進する運動をもつ」のだから、すると「このときから、言語は自由でない」。

(87) 2⁰) 連続性は不可分の一事実のように変遷を・重大であれなけれ価値のずれを、接続と切り離しがたく、含んでいる。La continuité enferme comme par un fait inséparable l'altération, déplacement plus ou moins considérable des valeurs, inévitable avec la durée.

<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第5文

この分析する運動の最高かつ最後のものは抽象的な最高の本質 — 換言すれば抽象的な主観的同一性と、この同一性に対立する差異性とである。das Höchste und Letzte dieses Analysierens ist das abstrakte höchste Wesen oder die abstrakte subjektive Identität und ihr gegenüber die Verschiedenheit.

二つのテキストに次の対応が認められる。

「連続性」：「分析する運動の最高かつ最後のもの」

「変遷」(行ける→行けられる)：「抽象的な主観的同一性」

「価値のずれ」(正用 vs. 誤用)：「差異性」

「接続」(聞手が誤用を理解する)：「抽象的な最高の本質」

本稿での例に即して「この分析する運動」が「30 代男の認識」であるように、「連続性」もまた「30 代男の認識」における「連続性」である。それは「行けられる」に「行ける」と同じ『可能』のニュアンスを見るのだから「抽象的な主観的同一性」だが — 「連続性」が「不可分の一事実のように変遷を含んでいる」のだから「変遷」は直接的であり⁽⁵⁾、したがって「抽象的な主観的同一性」である —、しかし前者は「途方もない言葉」として斥けられるのだから「差異性」を含んでいる。換言すれば、「30 代男の認識」(連続性)は「行けられる」(誤用)を聞手が理解することにおいて、「抽象的な最高の本質」である — 「抽象的な最高の本質」は「抽象的な主観的同一性と、この同一性に対立する差異性とである」から、「同一性と区別との同一性」が定立されていない。それゆえ聞手が誤用を理解することは「実在的根拠関係」であり、聞手は「他人[話手]の言を聞いて受けた印象 im·pression (←in·中に+premere 押す)」(CLG p.33)を基に、正用(根拠)の内容を誤用(根拠づけられたもの)のなかに見出す。'durée←durer [持続する・引き延ばす]'たるゆえんである —。

(88) 時間において変遷しない如何なる事柄もわれわれが知ることはない、
という事実を端的に引き合いに出しておこう。Invoquons simplement ce

fait que nous ne connaissons aucune chose qui ne s'altère dans le temps.

<大> a 分析的認識 4 パラグラフ 第 6 文

とはいえこの前進する運動はもっぱら分析という一つの根源的な行為の繰り返しにほかならない、すなわちすでに抽象的な概念形式のうちに受け入れられたものを具体的なものとしてふたたび規定すること・またこれにひきつづいてこの具体的なものを分析すること・さらにこの分析から出てくる抽象的なものを改めて具体的なものとして規定すること・こうして進んでゆくことにほかならない。Dieses Fortgehen ist jedoch nichts anderes als nur die Wiederholung des einen ursprünglichen Tuns der Analyse, nämlich die Wiederbestimmung des schon in die abstrakte Begriffsform aufgenommenen als eines *Konkreten* und hierauf die Analyse desselben, dann von neuem die Bestimmung des aus ihr hervorgehenden Abstrakten als eines *Konkreten* und so fort.

『大論理学』に謂う「この前進する運動」は「抽象的な最高の本質」であり、したがってそれは「分析という一つの根源的な行為の繰り返しにほかならない」⁽⁶⁾。それは「すでに抽象的な概念形式のうちに受け入れられたものを具体的なものとしてふたたび規定すること・またこれにひきつづいてこの具体的なものを分析すること・さらにこの分析から出てくる抽象的なものを改めて具体的なものとして規定すること・こうして進んでゆくこと」であり、例に即しては脚本家（聞手）が 30 代男の誤用を理解することであるから、つまりは「行ける→行けられる」のように「時間において変遷する事柄」⁽⁷⁾をわれわれが知る「認識する」こと」である。

かくして本稿（59）で「言うにとどめた」とされたこと、すなわち「変遷は連続性の諸形式の一つにすぎない」ことがその展開において説かれ、5 月 30 日の講義は終えられる。

注：

（1）国語学きつてのソシュールアンである森重敏は、これを「伝導」と呼ぶ（『日本

文法通論』p.2)。

(2)「行けられる」が「生きうべきものではあるが、生きてはいない」とき、「行ける」もまた「生きうべきものではあるが、生きてはいない」。「行けられる」が発せられることにより、いまや「行ける」も「単一な自立態〔慣用〕において表わし示されていない」からである。ただし以下では「行けられる」に焦点を合わせて論を進める。

(3)「統合関係は顕在である *in praesentia* ; それは実効のある系列のうちにひとしく現前する *présent* 二個以上の辞項にもとづく。」(CLG p.173)

(4)総理大臣の発言「できることはすべてやる」を聞いた沖縄県知事は、「できることはすべてやるという言葉は、できないことはすべてやらないとしか聞こえない」と語ったそうである(『東京新聞』2016年5月24日)。「できないことはやらない」のだから、「できることはすべてやる」はその限り「完全」である。

(5)『大論理学』初版に次の叙述が見出される — '*inséparable ; untrennbar*' — 。

<大> しかしまた同じく真理態は、両者が区別されていないことではなくて、両者は同一のものでないということ、両者は絶対的に区別されているのではあるが、しかしまたまさに分離しないものであり不可分のものであって、おのおのが直接にその反対のものなかで消失しているということである。Aber ebenso sehr ist die Wahrheit nicht ihre Ununterschiedenheit, sondern daß *sie nicht dasselbe*, daß sie *absolut unterschieden*, aber ebenso ungetrennt und untrennbar sind und unmittelbar *jedes in seinem Gegenteil verschwindet*. (Das Sein S.48)

(6)「繰り返し *Wiederholung*」については『大論理学』に次の用例がある。

<大> 生命としてまだ直接態の形式のうちにある理念は、その限りで現実性へと逆もどりするのであり、そして理念のこの反省は反復ならびに無限進行にすぎず、この無限進行においてはそれの直接態という有限性から歩みでてはいないのである。Die Idee, die als Leben noch in der Form der Unmittelbarkeit ist, fällt insofern in die Wirklichkeit zurück, und diese ihre Reflexion ist nur die Wiederholung und der unendliche Progreß, in welchem sie nicht aus der Endlichkeit ihrer Unmittelbarkeit heraustritt. (WdL II S.486)

(7)ヘーゲル論理学との論理的対応という点では重要な術語なので、訳語について触れておく。邦訳 CLG は原則的に '*chose*' を「もの」と訳すが、'*chose*' の独語訳である '*Sache*' は『大論理学』邦訳書で「事柄」と訳される。日本語における「モノ」と「コト」との区別をも勘案すると、'*chose*' を「コト」ないし「事柄」と訳す方がよい場合も少なくない。

テキスト：(訳文は、「第3回講義」のみ拙訳を用いた。その際『一般言語学講義』と

の整合性を保つように努めた。『一般言語学講義』および『大論理学』については邦訳書の訳文を借用したが、表記については訳文の文字種を変えた場合がある。）

Saussure, F. de, *Troisième cours de linguistique générale* (1910-1911), 1993, Pergamon Press, Oxford.

Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*, 1916, Payot, Paris. (小林英夫訳『一般言語学講義』改版 一九七二年 岩波書店)

Hegel, G. W. F., *Wissenschaft der Logik I・II*, 1986, Suhrkamp, Frankfurt am Main. (寺沢恒信訳『大論理学』全 3 巻 一九七七～一九九九年 以文社。ただし同邦訳書の「存在論」は初版のそれである。)

Hegel, G. W. F., *Das Sein* (1812) 1999, Felix Meiner, Hamburg.

テキスト以外の文献：

ケルナー・山中圭一訳『ソシュールの言語論 ― その淵源と展開』 一九八二年 大修館書店

丸山圭三郎『ソシュールの思想』 一九八一年 岩波書店

森重敏『日本文法通論』 一九六四年 風間書房

Wittgenstein, L., *Tractatus logico-philosophicus*, 1984, Suhrkamp, Frankfurt am Main.